

「教育臨床総合研究19 2020研究」

令和元年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on the “Basic Experience Area” in 2019

田中 径久*	橋津 健一*
Michihisa TANAKA	Kenichi HASHIZU
山根 貴史*	齋藤 英明***
Takafumi YAMANE	Hideaki SAITOU
長岡 美沙*	川路 澄人**
Misa NAGAOKA	Sumito KAWAJI

要 旨

島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」を実施してから16年が経過し、1000時間体験学修を修了した13期目の卒業生を送り出すことができた。

ここでは、令和元年度の「1000時間体験学修」における基礎体験領域の取り組みの概要、さらには基礎体験におけるアンケートから見た成果等について報告する。

〔キーワード〕 基礎体験領域、基礎体験におけるアンケート、成果と課題

I はじめに

「1000時間体験学修」は、1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程であり、「基礎体験」「学校教育体験」の2つの領域で構成される。「1000時間体験学修」の内訳は、「基礎体験領域」の「必修」が100時間、「選択必修」が540時間、「学校教育体験領域」が360時間となっている。

基礎体験領域は、地域の様々な活動への参加や社会教育施設などでの教育活動、小・中学校等での学習支援等を通じて、教師に必要な資質の土台となる社会性や豊かな人間性を養うものである。さらに、「子ども」「地域」「学校」という3つのフィールドと主体的に関わり、多様な体験をもとにした教育実践力を育むものである。基本的な流れは、各事業所が行う様々なプログラムの中から、興味・関心のある体験活動に参加し、活動を通して自分の課題に「気づく」、その課題の解決に向けた活動の方向性を「つかむ」、活動への取り組みを「深める」という段階を経て進めていくものである。また、活動にあたっては附属教育支援センター専任教員が、事前・事中・事後指導にあたり、学生の学びがより充実したものになるように支援を行い、学生は体験で得た学びを4年間で積み上げていく。

*島根大学教育学部附属教育支援センター

**島根大学教育学部初等教育開発講座（附属教育支援センター長）

***大学院教育学研究科教育実践開発専攻

また、活動を通して身につけさせたい資質・能力として10の教師力（学校理解，子ども理解，教科の基礎知識・技能，学習支援の指導技術，リーダーシップ・協力，社会参加，コミュニケーション，探求力，社会の一員としての自覚，リテラシー）を設定しており，評価の具体的観点としている。各活動の事後指導や各基礎体験セミナーの振り返りの際には，これらの観点をもとに活動記録票の振り返りシートに自己評価をさせ，自己認識や課題意識の深化などの自己成長を促している。

II 基礎体験領域における取り組みの経緯

1000時間体験学修がスタートした平成16年度から平成30年度までの15年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点については，過去の紀要を参考にしてもらいたい。令和元年度においては，各種セミナーを含む基礎体験活動の取り組みを表1にまとめ直すこととした。今年度の改善としては，3年次に行われる「応用期セミナー」が挙げられる。

3年次生は，進路の方向が決まっている学生ばかりではなく迷っている学生の割合も少なくない。そうした学生の状況に合わせるために，本セミナー後半部分の体験発表会の内容を変更した。これまでは，教員採用試験合格者，公務員試験合格者，一般企業への内定獲得者，大学院進学を考えている4年生の話を別々の会場で行い，3年時生は希望する会場に行き，話を聞くという形式にしていた。その形式から，1会場ですべての進路決定者の話を聞くことができるようにした。このことにより，教員採用試験合格者や企業内定者等，複数の進路先についてそれぞれの学生の経験談を聞くことができる。

今年度は，教員採用試験を受けるかどうか迷っている学生が多くいたこともあり，グループ編成を見直し，多くの4年生の話を聞くことができるように，場の設定を工夫した。

【表1】今年度の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点 ○：実施，◎：改善

	H28	H29	H30	R1	
入門期セミナー（1年生対象）	◎	○	○	○	
基礎体験セミナー	基礎体験合同説明会（1年生対象）			○	
	地域理解セミナー（1年生対象）			○	
	スタートアップセミナー（1年生対象）			○	
	充実期セミナー（2年生対象）			○	
	基礎体験交流会（1・2年生対象）	◎	◎	◎	○
	応用期セミナー（3年生対象）				◎
	スクール・インターンシップ説明会（3年生対象）				○
	スクール・インターンシップ【実習 Semester 学校教育体験】（3年生以上対象）				○
	発展期セミナー（4年生対象）				○
基礎体験活動連絡会議（年2回）	○	○	○	○	
基礎体験活動記録票	○	○	○	○	
事前・事中・事後指導の充実	○	○	○	○	
学内資格認定（3資格）	○	○	○	○	
だんだん塾講演会	○	○	○	○	
卒業生及び就職先への聞き取り調査等	-	-	-	-	
専任教員数	4名*	4名*	4名*	4名*	

（注）※ H28～R1年度 4名のうち2名は特任教員

Ⅲ 令和元年度の取り組み

《末尾に資料として「令和元年度基礎体験領域における年間活動実施一覧表」を掲載》

1. 基礎体験活動

(1) 基礎体験活動の参加実績（スクール・インターンシップ並びに専攻別体験等を除く）

基礎体験活動を卒業要件とする対象学年が4学年全てになってからの実績は、参加延べ人数2300名前後で推移していたが、近年は2000名を割り込むようになった。【表2】これは、2年前より入学者数が2割程度減った（募集定員170名→130名）ことが大きな原因であると考えられる。一方で、今年度の活動募集が358件と過去最も低かったにも関わらず、学生参加延べ人数が2000名近くまで回復している点は、大きな成果と言えるだろう。近年、学生が安心して学びを深めることができるように基礎体験活動の精選を行っており、平成27年度あたりから募集活動数が減ってきているとはいえ、今後も段階的に学生数が減っていくことを考えると、受入団体の要望（募集名数）を満たすことができない活動が増加していくことが懸念される。

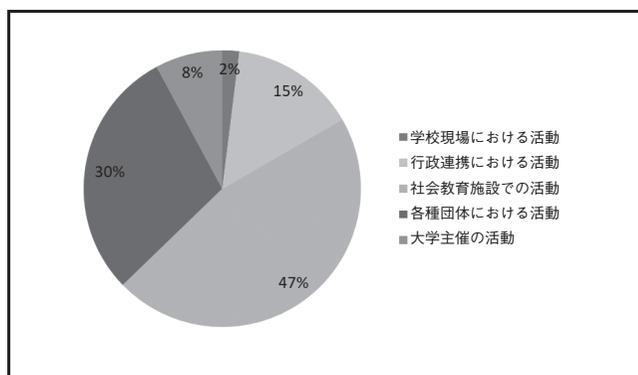
卒業要件とされる基礎体験（選択）400時間に対し、今年度の卒業生の平均体験時間は592.5時間であり、昨年度593.4時間と比較するとやや減少している。体験時間数の内訳を見ると、500時間以上行っている学生は全体の60%を占め、そのうち1000時間以上行っている学生は6.8%おり、半数以上の学生が500時間以上の体験活動を行っていることがわかる。

各期必修セミナー後のアンケート調査の結果も含めて、体験学修の意義が学生にしっかり理解されており、主体的・意欲的に取り組んでいることが伺える。

【表2】基礎体験活動への参加実績

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R 1
受入団体数（団体）	226	266	295	277	266	244	206	181	184	183	192	188
募集活動数（件）	451	475	504	511	508	496	443	392	391	387	379	352
学生参加活動数（件）	338	340	375	400	348	370	253	323	337	327	319	303
参加学生延べ数（名）	1898	1953	2397	2478	2292	2469	2396	2223	2305	1818	1913	1985

次に、今年度の体験活動の種別を参加名数による割合で示す【図1】と、青少年教育施設を中心とする社会教育移設での活動への参加が多い。続いて自各種団体における活動、行政連携における活動、社会教育施設での活動、各種団体における活動、大学主催の活動



【図1】基礎体験活動の参加種別（令和元年度）

学生個人における活動種別の割合を調べると、幅広く多様な活動をしている学生がいる一方で、同じ種類もしくは同じ事業主での活動のみに偏っている学生がかなりいることが以前より指摘されている。事前・事後指導や各セミナーの在り方を見直す等の改善策を検討し、活動種別の偏りを是正することで、教師力を総合的に育成するようにしたい。

学校現場における活動は、他の活動に比較して少なく思われるが、学校教育実習が行われる3年次生に、スクール・インターンシップ（実習semesterにおける学校教育体験活動）として別途行われているので、そちらを参照してほしい。

（2）だんだん塾（事前・事中・事後指導）

基礎体験活動を行う際には、必ず30分間ずつの事前・事後指導を行っている。活動が長期にわたる場合は事中指導を行う場合もある。事前指導においては、活動内容の概要を知らせるとともに参加理由を確認し、活動を通して何を学び、どんな力を付けたいかなどの目的を考えさせ、活動記録票の記入を通して明確にさせている。活動後の事後指導では、活動の振り返りを通して自分の成長や課題を確認したり、他の参加者と学びの共有化を図ったりすることにより、体験学修の有意義感を持たせるように努めている。また、学生から出された課題に対しては専任教員がアドバイスを送り、必要に応じて事業主と連携を取りながら今後の活動に向けての支援を行っている。これらの指導は4名の専任教員が地域割により分担して行っている。

（3）基礎体験セミナー

基礎体験活動の取り組みを振り返るとともに、活動の目的や積極的参加への心構えを再確認するために、各学年の段階に応じた各種セミナーを随時実施している。平成29年度より、社会教育に対する理解を深めることと、基礎体験活動におけるルールやマナーについて確認するために、1年生対象の「地域理解セミナー」を新設した。これから基礎体験活動を本格的に取り組む1年生にとって、たいへん有意義なセミナーになっているといえるだろう。

【表3】基礎体験セミナーの活動実績

学年	学年別各種セミナー
1年生	4月13日（土）～4月14日（日）入門期セミナー 4月17日（水）基礎体験合同説明会 6月19日（水）地域理解セミナー 9月25日（水）スタートアップセミナー 2月4日（火）1・2年生交流会
2年生	9月26日（木）充実期セミナー 2月4日（火）1・2年生交流会
3年生	6月21日（金）スクール・インターンシップ説明会 8月20日（火）スクール・インターンシップ合同事前指導 11月29日（金）応用期セミナー
4年生	9月24日（火）発展期セミナー

(4) 入門期セミナー

新入生を対象とした初年次教育のガイダンスである。今年度は下記の通り実施した。

- 1) ねらい ①教育体験活動「1000時間体験学修」の全体像を把握し、大学生活4年間の教育体験活動に対する見通しを持つ。
②これからの大学生活を共にする学生同士が交流を深め、円滑な人間関係を築くきっかけにすると共に、島根大学教育学部生としての自覚を高める。
- 2) 期 日 令和元年4月13日(土)～4月14日(日)
- 3) 会 場 島根県立青少年の家 サン・レイク
- 4) 参加者 島根大学教育学部1年生135名、学生スタッフ31名、教職員8名
- 5) 内 容

研修1…「1000時間体験学修の意義」	研修2…「基礎体験活動の進め方」
研修3…「出会いの場の演出と仲間づくり」	研修4…「大学生の一般常識とマナー」
研修5…「基礎体験活動や大学生活についてディスカッション」	
研修6…「クラス対抗レクリエーション」	研修7…「2日間の振り返り」

新入生によるセミナーに対する自己評価の結果は次の通りであった。肯定的回答5、否定的回答1とした5段階による数値の1年生全体の平均値を示す。

- | |
|--|
| ① 入門期セミナーは、有意義な活動となったか。【4.8】 |
| ② 同級生との交流を通して新たな人間関係を結ぶことができたか。【4.6】 |
| ③ 1000時間体験学修の全体像を理解することができたか。【4.5】 |
| ④ 教育学部生としての意欲や自覚を持つことができたか。【4.5】 |
| ⑤ 入門期セミナーに向けて立てた個人目標は達成できたか。【4.4】 |
| ⑥ 学生スタッフ（教育学部2，3回生）のサポートやアドバイスは役立ったか。【4.9】 |

各観点とも平均値は全て4ポイント以上で肯定的な数値であった。特に本セミナーの有意義感と学生スタッフのサポートに関わる数値が高くなっている。観点③～⑤についても、昨年度よりポイントが上がっており、研修1の教員による講義と、1000時間体験学修に関する学生企画研修（研修2，4，5）との繋がりやねらいがうまく合致したと考えられる。今後も、学生スタッフと教員の連携を密にして、より効果的な入門期セミナーのあり方を探っていきたい。

また、本セミナーの特徴は、ピア・サポート制度を活用し、先輩である上級生によって研修内容の大半が企画・運営されている点にある。今年度は、31名の上級生が学生スタッフとして参加した。研修2～6を学生企画として担当し、新入生の目線に立ったセミナーを実施した。



研修5 ディスカッション

新入生の感想を見ると、入学当初の不安が解消され、これから始まる大学生活への意欲や希望

が高まったという感想と共に、生き生きと活動する学生スタッフの姿に刺激を受け、強い憧れと理想的な大学生像をもつことができたという感想が多くあった。また、学生スタッフの振り返りには、リーダーシップや協調性、企画力や運営力などの総合的な自己能力の成長を感じるとともに、今後の課題について言及している内容が多くあった。

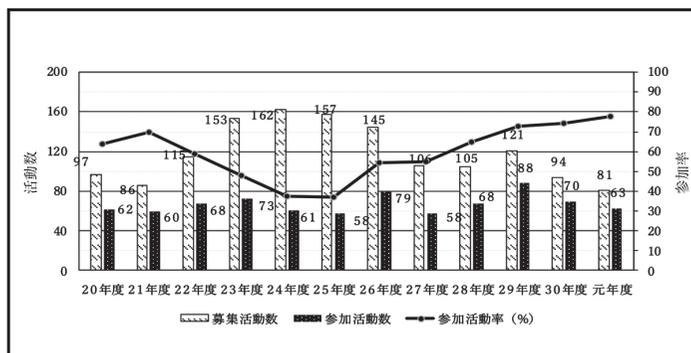
学生参画による入門期セミナーは、新入生、上級生、両者にとって学びの多い貴重な体験の場となっており、今後も充実した活動にしていきたいと考える。

(5) スクール・インターンシップ (実習semesterにおける学校教育体験活動)

3年生後期の教育実習(実習Ⅳ・Ⅴ)期間の9月から12月を実習semesterとし、その期間に附属学校園での教育実習の学びと、公立学校での体験を互いに往還させながら教育実践力を高めることをねらいとして、平成18年より学校教育体験活動の推進に取り組んでいる。

6月下旬に開催した説明会では、公立学校での校長経験のある教育支援センターの教員、昨年度の体験者である4年生、平成30年度本学部卒業の現職教員の1名に、スクール・インターンシップで得られる学びについて、それぞれの立場から話してもらい参加意欲の向上を図った。

スクール・インターンシップの募集については、第Ⅱ章に既述している通り松江市、米子市、境港市、隠岐郡の4地域の教育委員会を通じて学生の受け入れ募集を行った。その他の協定市町村内の学校については、学生の希望により受け入れを依頼するオプションとして対応することとした。

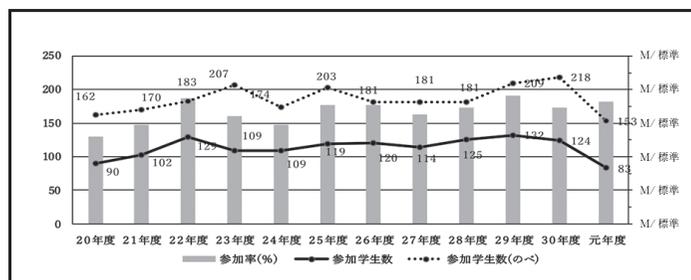


【図2】スクールインターンシップの募集活動数等の推移

今年度は44の学校園より81の活動募集があった。昨年度の募集学校園数78、活動数94から減少している。これは、昨年度多く実施した高校での活動を、今年度より専攻別体験として各専攻を通して申し込むことにしたことと、幼稚園での実施がなくなったことが大きな要因と考えられる。それに伴って、学生の参加活動数も70から62と減少したが、参加活動率(実際の活動数/募集活動数)は74.5%から76.5%と若干伸びた。

また、参加名数等の推移を【図3】に表した。今年度は参加学生数が82名、延べ人数が143名と大きく減少した。これは参加対象となる3年生の定数減が要因とされる。唯一参加率は71.9%と前年度より増加した。

対象学生の教職志向性が高まりつつあり、一人が複数校に参加したことが影響していると考えられる。このような学生を増やしていくためにも、事前説明会での統計的データやアンケート等を用いた分かりやすい趣旨説



【図3】スクールインターンシップの参加人数等の推移

明と学生のニーズに合わせた専任教員によるきめ細かい支援をより充実させていきたいと考えている。それと共に、ルールやマナーの順守、活動に対する主体性など、学生の取り組み姿勢について指導を徹底していきたい。

次に教師力10の指標のうち、学校教育体験に直接関わる指標について、実施前後を比較したデータは下記に示す通りである。【表4】殆どの指標において、2年生2月の時点より数値が伸びている。これは、教育実習での学びが大きいと考えられるが、スクール・インターンシップの影響も大きいと感じる。特に、スクール・インターンシップ事後指導後は学校理解の分野で大きく数値が伸びており、スクール・インターンシップへの参加が校種の特色理解や教師の仕事理解につながっていることが伺える。教育実習では、授業実践をすることで精一杯だった学生が、スクール・インターンシップでは、ゆとりをもって学校全体や担任の仕事の様子等を観察することができ、理解を深めることに繋がったと考えられる。反面、子ども理解や教科基礎知識・技能、学習支援のための指導技術でスクール・インターンシップの事後指導時でのポイントが学校理解ほど伸びていない、或いは減少しているのは、子どもと関われば関わるほど、子ども理解の難しさや個別の支援の難しさを経験し、自分の力量不足を感じるとともに課題を見つけた結果であると推測される。

【表4】スクール・インターンシップ参加学生の学びについて

設 問		2年生 2月	スクール・インターンシップ 事後指導後 (10～3月)
学校理解	学校や校種の特色等を理解することができた。	3.0	4.1
	教師の仕事などを理解することができた。	3.1	4.1
子ども理解	子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができた。	4.0	3.9
	幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応が適切にできた。	3.6	3.7
教科基礎知識・技能	学習支援する教科等に関する基礎的基本的な知識や技能が身についた。	2.7	2.9
学習支援の指導技術	学習支援のための指導技術が身についた。	2.7	3.3

受入れ校（アンケート協力51校園）からの評価の結果は次の通りであった。肯定的回答5，否定的回答1とした5段階による数値の平均値を示す。

- | | | |
|-----------------------------|----------------|--------------|
| ① 学生の活動は、貴校の期待通りであったか。【4.5】 | | |
| ② 参加学生の様子について | | |
| ・参加意欲、態度【4.5】 | ・子どもへの接し方【4.4】 | |
| ・学習支援の姿勢【4.3】 | ・挨拶等マナー【4.5】 | ・服装等生活面【4.5】 |
| ③ 実習セメスターに関わる手続き、説明について | | |
| ・実施前の説明の時期【3.7】 | ・説明内容【3.6】 | ・募集の手続き【3.6】 |

学生たちの活動は、ほとんどの受け入れ校の期待やニーズに応えることができた。

また観点別評価では、いずれの項目も高い数値である。学生自身が自主的に登録していることや教育実習を通しての指導など、大学での取り組みが成果を上げていると考えられる。

(6) 専任教員による日常相談活動

学生からの要望で、不定期ではあるが基礎体験活動や広く生活面における個別相談、教員採用試験に向けての願書添削や面接指導、小論文指導等を行っている。基礎体験活動の事前・事後指導や学校教育体験領域における学校教育実習、学校教育実践研究などで顔見知りの学生も多く、あらゆる相談の窓口となっている。また、現役で教員採用試験合格を目指す学生を支援する「未来教師塾」が開設され、専任・特任教員もその指導者として協力している。

(7) だんだん塾講演会

今年度も基礎体験領域部門とC系G系領域部門の連携を図り「だんだん塾講演会兼C系G系特別講義」として共同で開催した。毎回参加者も多く、講演内容は、学校教育現場に直接関わる内容や、自己の生き方・暮らし方に関わる内容等で学生にとって充実した実践的な内容になったと考える。

【表5】だんだん塾兼C系G系特別講義の開催実績

回数	月 日	講演者	講演テーマ	参加人数
第1回	7月3日(水) 14:55-16:35	松江市立東出雲中学校校長 山本 幸市 氏	学級経営 ～グループからチームへ～	39名
第2回	7月10日(水) 14:55-16:35	松江市立第一中学校校長 門脇 岳彦 氏	教育現場が求める人材	36名
第3回	7月17日(水) 14:55-16:35	境港市民図書館館長 元境港市立渡小学校校長 嘉賀 収司 氏	教育現場の実際とやりがい ～魅力溢れる教師になるために～	41名
第4回	12月18日(水) 14:55-16:35	島根県浜田児童相談所所長 岩谷 宏一 氏	アドラー心理学から見た教育現場 への提言 パート2	76名
第5回 (1/8 延期)	1月29日(水) 14:55-16:35	雲南市立三刀屋小学校講師 元雲南市立木次小学校校長 若槻 徹 氏	主体的・対話的で深い学びのため のICT利用・活用	49名
第6回	1月15日(水) 14:55-16:35	島根県教育庁教育指導課地域 教育推進室地域教育スタッフ 社会教育指導主事 後藤康太郎 氏	少し未来の学校 ～新学習指導要領とふるさと教育・ 教育の魅力化～	42名

2. 学内資格認定制度

【表6】学内資格認定者数

教教育支援センターでは、「体験学修ピア・サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス・サポーター」の3つの学内資格を設定している。今年度の認定者は延べ9名であった。【表6】

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	2名	3年生1名 4年生1名
学校教育サポーター	4名	4年生4名
コミュニティサービス・サポーター	3名	3年生1名 4年生2名

今年度の資格認定者は、オープンキャンパス、スタートアップセミナー

(1年生対象)、地域理解セミナー(1年生対象)、充実期セミナー(2年生対象)、基礎体験交流会(1・2年生対象)において自己の体験活動で得た学びを伝えたり、下級生の体験発表へのコメントやアドバイスを行ったりした。下級生にとって先輩の生の声は説得力があり、自分自身の数年後の姿と重ね合わせながら熱心に聞いていた。

3. 各事業所との連携

基礎体験活動を推進していく上で、年間約500件近くの活動を提供してくださる事業所との連携を密にしていくことは、体験の量的充実だけではなく、質の向上においても大切である。今年度も、基礎体験活動合同説明会を1回、基礎体験活動連絡会議を2回実施し、本活動の趣旨や期待する学び、募集手続き等についての共通理解を行った。また、連絡会議では情報交換を通して、学生によりよい学びの場や環境を作るとともに、受入事業所にとっても大学と連携することによるメリットのある活動のあり方や、学生募集の方法について話し合った。

(1) 基礎体験活動合同説明会及び第1回基礎体験活動連絡会議

《平成31年4月17日(水)》

基礎体験活動合同説明会 (14:55～15:55)	場 所：第2体育館 参加者：1年生135名 事業所 18団体
基礎体験活動連絡会議 (16:15～17:30)	場 所：教養講義棟2号館2階504号室 参加者：62団体87名 教育支援センター7名

入門期セミナーを終え、基礎体験活動への意欲が高まっている1年生を対象に、実際の受入事業所を招いての基礎体験活動合同説明会を実施した。今年度は18団体に参加いただき、予定されている活動内容等について、1時間のポスターセッション方式で説明していただいた。学生たちは各ブースをまわり、活動内容の話の聞いたり、体験の様子など質問したりしながら、今後どのような活動に取り組んでいこうかと真剣に考えているようであった。



基礎体験活動合同説明会

また、合同説明会終了後の連絡会議では、1000時間体験学修のねらいである、豊かな人間性と実践的な指導力育成に向けての取り組み方針や、基礎体験活動の流れ、事務手続、緊急時の連絡方法等について説明し、学生にとって有意義な体験活動にするために双方の共通理解を図った。

(2) 第2回基礎体験活動連絡会議

《令和2年2月18日(火)》

基礎体験活動連絡会議 (14:00~16:00)	場 所：教養講義室2号館1階401号室他 参加者：50団体より70名 教育支援センター7名
-----------------------------	--

今年度の活動報告と学生の取り組み状況についての説明、及び来年度の方針をお伝えした。

その後の分科会は、主催団体別に4会場に分けて実施した。各事業所からは、学生に対して意欲的に取り組んでいると評価していただいた。また、学生の効果的な活用や振り返りの重要性など、今後の取り組みに対する提案も多く出され、受け入れ先事業所同士の情報交換も図られた。



基礎体験活動連絡会議(分科会)

IV 基礎体験におけるアンケートからの成果

基礎体験における令和元年度の学生の学びはどのようなものであったか、その学修成果や取り組みの実態について、各学年のセミナーで行った学生の自己評価アンケート、ならびに受け入れ先事業所からのアンケートよりまとめた。

1. 基礎体験活動の評価について

基礎体験活動は、地域の学校や社会教育施設等との連携と協力により、学生の資質・能力の向上をめざし、「教育実践力」「対人関係力」「自己深化力」からなる「教師力」を培うことをめざして実施しているものである。

基礎体験活動としてねらう力は、活動毎の振り返りに使用している基礎体験活動記録票や、プロフィールシートにも示されている、10の教師力を基に作成したものである。そして、学年毎に実施している基礎体験セミナーでこの評価項目を基にして自己評価も行っている。

ここでは、1・2年生は基礎体験交流会【1・2年生交流会】(2月)、3年生は応用期セミナー(12月)、4年生は発展期セミナー(9月)で行った自己評価アンケートと共に、受け入れ先の事業所からのアンケートを基に、今年度の基礎体験の学びを振り返ってみる。

2. 各セミナーで行った自己評価アンケート結果

基礎体験活動の自己評価項目を、プロフィールシートの10の教師力に合わせた10項目(軸)と、その具体的目標である20項目の評価項目に設定している。

【表7】基礎体験領域の自己評価項目一覧

1) 学校理解

- ① それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。
- ② 教師の仕事（授業実践・学級経営・校務分掌）を理解することができたか。

2) 子ども理解（学習者理解）

- ① 子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができたか。
- ② 幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか。

3) 教科基礎知識・技能

- ① 学習支援する教科等に関する基礎的・基本的な知識や技能をもつことができたか。

4) 学習支援のための指導技術（授業実践研究）

- ① 学習支援のための基礎技術をもつことができたか。

5) リーダーシップ・協力

- ① 状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすることができたか。
- ② 活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか。
- ③ グループの仲間、教員、地域の方々と協力して活動することができたか。

6) 社会参加

- ① 自ら進んで地域社会と関わりをもち、主として学外での活動に積極的に取り組めたか。

7) コミュニケーション

- ① 学校や地域の方々と積極的に関わりをもとうとすることができたか。
- ② 場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。
- ③ 実際の活動場面で子どもの話を聞き、それにきちんと答えることができたか。
- ④ 体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。

8) 探求力

- ① 自分の長所や短所、これから伸ばしていきたい能力、克服すべき課題をきちんと把握できたか。
- ② 仲間と協力して企画を立ち上げ、実施するところまで責任をもって行うことができたか。
- ③ 自らの課題や友達と協同する課題などを解決することができたか。

9) 社会の一員としての自覚（教師像・倫理）

- ① 社会の一員としての自覚と責任を持って行動することができたか。

10) リテラシー

- ① コンピューター等を活用して、体験に関わる必要な情報を収集したり、体験活動に関する手続きをしたりすることができたか。
- ② 参加した体験をふり返り、活動記録票をまとめたり、自己評価を整理したりできたか。

この10軸20項目の自己評価項目で、今年度の各セミナーの評価結果を表にまとめたものが、【表8】である。各評価項目とも、その結果を5段階評価の平均値で示している。

(表8中のIとIIは、基礎体験への取り組みと有意義感の自己評価結果である)

【表8】学生の基礎体験の自己評価結果

学年名・調査人数 評価の実施時期		5段階自己評価の数値の平均値				
		1年生 134名 2020年2月	2年生 130名 2020年2月	3年生 107名 2019年12月	4年生 167名 2019年9月	全 平 均
	I 取り組み	3.6	3.4	3.5	3.4	3.5
	II 有意義感	4.4	4.1	4.1	4.0	4.2
1	学校理解①	3.2	2.9	3.9	3.6	3.4
2	学校理解②	3.4	3.0	4.0	3.7	3.5
3	子ども理解①	4.1	3.9	3.9	4.0	4.0
4	子ども理解②	3.9	3.7	3.6	3.6	3.7
5	教科基礎知識・技能	3.2	2.6	3.4	3.3	3.1
6	学習支援の指導技術	3.1	2.6	3.3	3.4	3.1
7	リーダーシップ・協力①	3.7	3.7	3.6	3.7	3.7
8	リーダーシップ・協力②	4.1	4.1	4.2	4.3	4.2
9	リーダーシップ・協力③	4.3	4.1	4.3	4.3	4.3
10	社会参加	4.0	3.9	3.8	3.8	3.9
11	コミュニケーション①	4.2	4.0	3.9	4.2	4.1
12	コミュニケーション②	4.4	4.3	4.4	4.4	4.4
13	コミュニケーション③	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1
14	コミュニケーション④	4.2	4.2	4.1	4.1	4.2
15	探求力①	4.1	4.0	4.2	4.1	4.1
16	探求力②	3.7	3.5	3.5	3.6	3.6
17	探求力③	3.9	3.8	3.9	3.9	3.9
18	社会の一員としての自覚	4.1	4.1	4.2	4.2	4.2
19	リテラシー①	3.9	3.9	4.0	4.1	4.0
20	リテラシー②	4.2	4.0	4.0	4.2	4.1

表8の基礎体験活動への「取り組み」の様子と「有意義感」の評価結果について述べる。

基礎体験活動の取り組み状況は、3.4～3.6（5段階評価）と、昨年度より良好な取り組み状況が伺える結果となった。全体の平均では、3.5（5段階評価）という結果で、1年生の3.6という結果からは基礎体験活動への積極的な取り組みの様子が伺える。一方、各学年の有意義感の回答結果は、4.0～4.4であり、多くの学生が基礎体験活動に有意義感をもっていることが分かった。しかしながら、全体的に高い平均値を示しているが、学年が上がるに連れて、有意義感の数値が下がっている状況が見られる点が少し気になる。

有意義感が高い理由を考えると、学生のアンケート記述から大きく3点に集約できる。

1) 子どもとのかかわり

- ・子どもたちの成長する姿、発達段階を実感することができる。
- ・子どもたちとの関わり方や声かけ、コミュニケーションの取り方を実践できる。
- ・教わる側から教える側へ、立場の転換を感じることができる。

2) 支援・指導の実際

- ・授業や学習支援の現実を把握でき、自分自身のスキルアップにつながる。
- ・日常の活動の在り方や教職等の仕事理解や体験ができる

3) 企画・運営力の伸長

- ・企画・運営を体験することで、責任感・手順を学んだり達成感を味わえたりする。
- ・様々な人と協力して活動することで、組織の在り方について考えることができる。

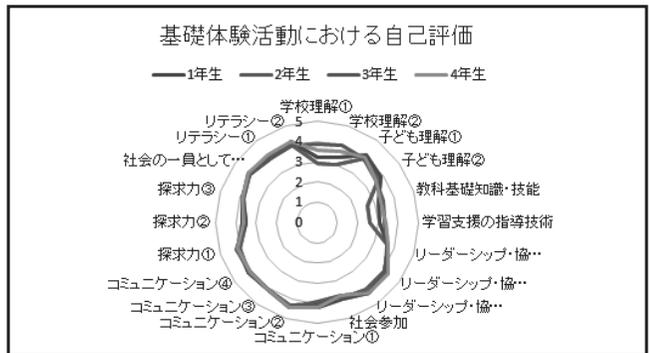
全体として、社会人としての責務や貢献による達成感を感じることができるところが大きい。逆に、有意義感を感じない理由として、少数意見ではあるが、「バイトの時間がなくなる。課題する時間もなくなる。」「教師にならないので、やる意味を見出せない。」「やらされている感が拭えないため。」など、個人的な考え方を理由に挙げる様子が見られた。

さらに、1～20項目の自己評価の平均値を学年別にレーダーチャートのグラフにしたものが、【図4】である。

本データは、同一学年の4年間の変化を示したものではないが、【図4】のグラフからわかるように、「学校理解」や「教科の基礎知識・技能」「学習支援の指導技術」の項目は学年が上がるに連れて高くなる傾向にあるということが分かる。

全体の平均値の高いものとして、コミュニケーション②（場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか）、リーダーシップ・協力③（グループの仲間、教員、地域の方々と協力して活動することができたか）等があげられる。この項目については、学年による大きな差異は見られず、高い結果となった。

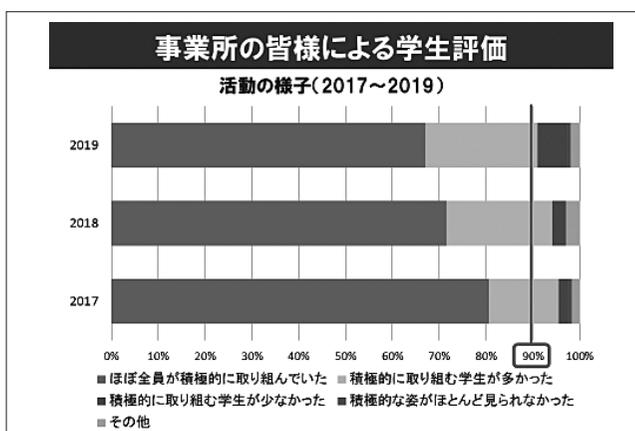
逆に平均値の比較的低いものとしては、「教科基礎知識・技能」「学習支援の指導技術」があげられる。また、「教科基礎知識・技能」「学習支援のための指導技術」の平均値が、1・2年生より3・4年生の方が高くなる傾向にある。これは、3年生で行われる教育実習Ⅲ・Ⅳ・Ⅴや3年生後期での実習セメスターにおける学校教育体験活動を経験した影響が大きいと考えられる。「教科の基礎知識・技能」や「学習支援の指導技術」は、教科の専門的な力量や指導経験が大きく影響し、より高い技能や技術を求めている学生も多くいると考えられる。特に、1・2年生は学習支援の経験が乏しく、今持っている知識や技能、技術を高めていきたいと考えていることから、他の項目より自己評価が低くなったものと思われる。



【図4】学生の基礎体験活動における自己評価結果を表したグラフ

3. 受け入れ先事業所アンケート

教育支援センターでは、毎年受け入れ先事業所にアンケートを送り、基礎体験活動の学生の取り組みの様子を毎年度末に評価していただいている。その調査項目の1つである、「学生は体験活動へ積極的に取り組んでいましたか」の回答結果をグラフにしたものが【図5】である。



【図5】受け入れ先事業所からの学生の取り組み状況のアンケート結果

「積極的に取り組んでいた」と「おおむね積極的に取り組んでいた」を合わせると、90%を超えていることから、

学生が体験活動に積極的に取り組んでいる様子がわかる。本年度は「積極的に取り組んでいた」の割合が昨年度よりも下がり、「積極的に取り組む学生が少なかった」の割合が上昇した。記述欄には学生によって個人差があり、活動先での取り組み方について、事前・事後指導や基礎体験セミナー等を通して、学生にしっかりと指導していく必要がある。

次に、各事業所から送っていただいたコメントを紹介する。学生の意欲的な取り組みに対する好意的な内容が多かったが、その一方で「指示がなければ動かないではなく、もっと積極的に動いたほうがよい」や「メールや電話での連絡がとれなかったり、返信が遅かったりする」という意見が例年寄せられている。この件に関しては、在学生ガイダンスや各種セミナーで、学生指導を充実させていく必要があると考える。

【事業所からのコメント】

- 専門的な知識を持ってご指導頂き、生徒も大変喜んでおります。本年度はお世話になり、ありがとうございました。
- 参加されたすべての学生さんが、意欲的・積極的に活動に携わり、自分で考え行動する姿や子ども達と進んで関わりを持つ姿が見られた。
- 参加態度とても良く、中高生のお手本となってくれています。大学で学んだこと（話し合いの進め方、中高生への言葉かけ、思いを引き出す力）をしっかりと生かし、活動を導いてくれています。
- 目的意識を持って、積極的に活動する学生が多く、活動毎に課題を立てて取り組む姿勢が見られた。
- 子どもと触れ合うことが初めての学生さんも熱心に活動に参加してくださっています。経験のある方には、より安心感をもって活動に参加してもらい、心強いです。
- 礼儀正しく、自分で考え、キビキビと動く姿に好感がもてた。
- 回を重ねるごとに積極的に活動されたように感じました。色々な事を自分なりに考え、次の支援の際に生かそうとする姿勢があり、意欲的に活動されたと思います。

△今年度、突然学生と連絡がとれなくなり、関係した児童、保護者に不安を与えた。今後、再発防止等に向けた対応策を大学側とも協議していきたい。

△大学へのキャンセル連絡はしているが、当所への連絡がないということがあります。

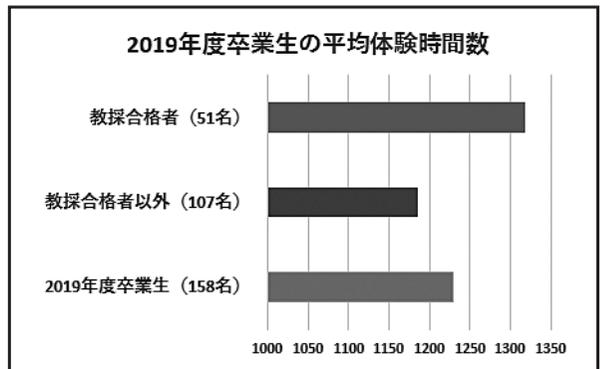
△1回も活動に参加していない人がいます。1度は経験してほしいと思います。

△とても真面目です。だからこそ「～しなければならない」という方向にいきがちで、自分を出すことや主体的な態度は少なく受け身だと感じます。人とかかわること（話す、聞く、考えたことを行動する）ことが少ないと感じます。

△言われた事だけでなく、学生が主体的に動く事を期待する。

V 成果と今後の課題

今年度も本稿で報告した通り、多くの学生が地域に出かけ、様々な基礎体験活動に参加し、たくさんの学びを得ることができた。【図6】に示した卒業生の平均体験時間を見ると、基礎体験活動が教師力の育成に大きく影響していることが伺える。また、卒業生の平均体験時間が1200時間程度あり、卒業要件である1000時間を大きく超えていることから、学生自身が体験活動の有意義さを実感し、主体的に活動に取り組んでいることも分かる。



【図6】2019年度卒業生の平均体験時間

今年度も、この学修での学びの質を高めることに主眼を置き、現状の再分析と把握、問題点の抽出、改善に向けての取り組みを行ったので、以下、学生の取り組み状況と募集活動に係わる主な課題と今後の方向性について挙げていく。

・学生の取り組み状況について

○スケジュール管理が不十分、連絡マナーの不徹底等で、体験活動先に対して迷惑をかけてしまう学生が何人か見られた。

⇒基礎体験セミナーや在学生ガイダンス等で、体験活動におけるルールやマナーについて繰り返し指導していく。また、1年次に学んだ「地域理解セミナー」で学んだルールやマナーについて、同じスライドを用いて繰り返し確認していく。

○体験活動に対して後ろ向きで、自らの都合を優先してしまい、突然のキャンセルや活動を途中でやめてしまう学生が見られた。

⇒活動の意義や事業主の思いを想起させ、事前・事中指導の充実を図る。また、通年の活動においては、学生の活動への参加回数ではなく、半期での事中指導を行い、自分自身の活動への取り組みを振り返る場を設定する。

○3年次の教育実習を前にして、基礎体験活動での子どもとのかかわりが不足しているために、適切な対応力が不十分な学生が見られる。

⇒基礎体験セミナーやガイダンス等で4年間の体験活動モデルを積極的に提示していく。特に、1・2年生の基礎体験セミナーにおいて、話し合い活動を充実させると共に、4年間の体験活動への見通しが持てるように、学生アドバイザーからの話を聞く機会を設ける。

○スクール・インターンシップでは、特に小学校現場からのニーズの高まりを感じており、学校現場に大学生が赴くことでWINWINの関係を構築できている。

⇒スクール・インターンシップの募集がある学校について、3年生の参加希望がなかった場合や参加人数に余裕がある場合は、1・2年生からも希望があれば、基礎体験活動として認めるようにする。

○特定の体験活動、同じ活動先でのみ体験時間を重ねており、活動に多様性のない学生が見られる。

⇒基礎体験セミナーにおける学生同士の話し合い活動の時間を充実させ、活動ごとに得られる学びが違うことを実感できるようにしていく。

・募集活動に関わって

本学の1000時間体験学修のカリキュラムが地域の方々に認知されるようになり、協力していただけの事業所が増加し、多様な体験の場が供給されるようになった。しかし、体験活動のマンネリ化や事業主と学生との慣れ合いから、活動が学生任せになっていたり、学生に過度な負担を強いたりする体験活動も見られる。また、教育学部生の減少に伴い、体験活動に十分な学生数を供給することが難しくなっている。

そこで、基礎体験活動連絡会議などの機会を通じて、基礎体験活動の充実と協力体制の在り方について、今後も広報しながら活動内容の質的向上を図っていく方針である。以下はその視点である。

○学生にとって、活動の安全、安心が保証されている。

○体験先での学生指導（事前オリエンテーションによる活動内容の明確化、活動後の振り返りの時間の確保）体制が確立されている。

○学生の参加の仕方について柔軟に対応する。（例えば、通年の活動で、参加期待人数以上の学生が登録し、一度の活動の参加人数には上限を設けるなど）

令和元年度 基礎体験領域における年間活動実施一覧表 附属教育支援センター

	活動名	対象	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
学 内	基礎体験セミナー	1年	入門期 セミナー 基礎体験 合同説明会	地域理解 セミナー		スタート アップ セミナー							基礎体験 交流会		
		2年					充実期 セミナー							基礎体験 交流会	
		3年									応用期 セミナー				
		4年													
学 外	だんだん熟講演会 (サポーターマイスター講演会)	共通				講演者 山本孝一氏 阿脇高彦氏 新屋収司氏						講演者 若槻 徹氏 後藤康太郎氏			
		共通		専任教員による学生支援活動 ①基礎体験学修の事前・事後指導 ②日常的な相談活動 ③教員採用試験にむけての面接指導等											
		3年		説明会											
		専攻学生		合同 事前指導											
民 間	NPO法人ほか民間団体	共通		教育学部の各講座の専門性を生かした、講座主催による年間を通じた体験プログラムの実施											
		共通		キャンプ、ジュニアリーダー養成研修、レクリエーション指導者養成、週末子ども体験事業 他											
学 外	国立三船青少年交流の家	共通		研修事業及び施設ボランティア 他											
	島根県	共通		青少年教育施設での研修及び施設ボランティア、特別支援学校学習支援、他											
	島根県	共通		青少年教育施設での研修及び施設ボランティア、特別支援学校学習支援、鳥取県西部地区中学生キャリア教育等の支援事業 他											
	安来市	共通		青少年支援センター学習支援員、青少年相談室サポーター、青少年相談室学習支援員、スクール・インターシップ 他											
	出雲市	共通		2019やすぎ子ども探検隊、島田わんぱくクラブ、わくわく子ども大会、夏休み子どものつどい、なかうみマラソン全国大会ボランティア、スクール・インターシップ 他											
	雲南市	共通		出雲陸上教室練習支援活動、伊野・べーション、出雲の子リーダー養成研究会、スクール・インターシップ 他											
	大田市	共通		ピョウびんえいご、加茂岩倉春まつり、雲南ひまわり福祉会ひまわり祭、スクール・インターシップ 他											
	江津市	共通		三瓶高原ロスカントリー大会スタップ、中・高生地域ボランティアグループ「大田IOいんつづ」、スクール・インターシップ 他											
	浜田市	共通		放課後アイサービス支援活動											
	奥出雲町	共通		スクール・インターシップ											
	飯南町	共通		スクール・インターシップ											
	川本町	共通		*学びサポーター隊（学習支援活動など）、子どもの居場所サポート（プログラムの企画運営）											
	美郷町	共通		スクール・インターシップ											
	島根町	共通		島根の子どもたちの隠岐体験学習事業、スクール・インターシップ											
隠岐の島町	共通		島根の子どもたちの隠岐体験学習事業、アドベンチャーキャンピングinあま、スクール・インターシップ												
海士町	共通		島根の子どもたちの隠岐体験学習事業、西ノ島中学校学習支援												
西ノ島町	共通		島根の子どもたちの隠岐体験学習事業、「ふるまひ向上台箱」における支援、スクール・インターシップ												
知夫村	共通		島根の子どもたちの隠岐体験学習事業、「ふるまひ向上台箱」における支援、スクール・インターシップ												
鳥取県米子市	共通		米子市少年少女科学教室、米子市子ども☆☆未来塾、米子市美術館ミュージアムスクール活動サポーター、みその子どもクラブ、スクール・インターシップ 他												
宍港市	共通		宍港市小学生英語土曜学習「宍港うきうきイングリッシュ」、宍高等学校スクール・プロジェクト、宍港市民図書館基礎体験、スクール・インターシップ 他												
日吉津村	共通		日吉津小学校「大山セカンドスクール」												
南部町	共通		伯耆町通学舎												
伯耆町	共通		伯耆町通学舎												
日南町	共通		伯耆町通学舎												
大山町	共通		伯耆町通学舎												
鳥取県鳥取市、八頭郡 岩美郡、倉吉市、東伯郡	共通		子どもの学習支援事業「遊び・学び・体験みつ基礎」の学習支援活動、重文・門脇家住宅春季公開見学会協力員、スクール・インターシップ T F 倉吉（陸上教室）支援活動、高校生男子バレーボール部指導補助、若桜学園 夏休み学習支援活動、倉吉地域未来塾、スクール・インターシップ 他												